



## 奈良・平城京跡

所在地 奈良市法華寺町・芝辻町・四条大路  
調査期間 平城京左京二条二坊十二坪・二条大路 一九八四年(昭59)七月~一二月、左京一条三坊十二坪 一九八四年一~二月、左京四条二坊七坪 一九八四年一〇月~一月、左京三条三坊九坪 一九八四年九月

年(昭59)七月~一二月、左京一条三坊十二坪 一九八四年一~二月、左京四条二坊七坪 一九八四年一〇月~一月、左京三条三坊九坪 一九八四年九月

所在地	奈良市法華寺町・芝辻町・四条大路
調査期間	平城京左京二条二坊十二坪・二条大路 一九八四年(昭59)七月~一二月、左京一条三坊十二坪 一九八四年一~二月、左京四条二坊七坪 一九八四年一〇月~一月、左京三条三坊九坪 一九八四年九月
調査担当者	西崎卓哉・篠原豊一・立石堅志・奈良美穂
遺跡の種類	都城跡
遺跡の年代	奈良時代
発掘機関	奈良市教育委員会
調査担当者	西崎卓哉・篠原豊一・立石堅志・奈良美穂

### 7 6 5 4 3 遺跡及び木簡出土遺構の概要

#### 一 平城京左京二条二坊十二坪・二条大路

本遺跡では、さきに十二条西半部から二条大路にわたる地域の調査を行つており、その成果はすでに報告した(『木簡研究』第五・六号)。今回の調査は十二条東半部からわずかに二条大路にかかる地域を対象として行つた。両調査区をあわせて四五二〇m<sup>2</sup>、十二条の三分の一ほどを発掘したことになる。

今回検出した主な遺構は二条大路の一部とその北側溝・築地塀・



基礎石建物二棟・回廊・掘立柱建物二〇棟・井戸二基・土壌である。さきの調査成果とあわせて、十二坪が一町を分割することなく利用されており、中央の正殿を回廊で取り囲むというきわめて整然とした建物配置をもつことが知られた。

木筒は一条大路の北側溝から二二点が出土した。同溝は幅三・五・四・五m、深さ〇・七mほどの素掘りの東西溝。今回は四〇m分を検出している。堆積層からみて、溝には新・旧の二時期があり、それぞれの時期の堆積層はさらに細区分できる。木筒は、このうち新期の溝の最下層、黒色粘土層から出土した。他に瓦・土器・木製品が出土しているが、この中には「店梨」の墨書土器が含まれる。また、十二坪内では「相撲」「口撲所」「左士」「真万呂」などと墨書された土器が出土している。

## 二 平城京左京一条三坊十二坪

本調査地は十二坪の東辺部から東二坊坊間大路の一部に相当する。発掘面積は六〇坪と小範囲であったが、井戸一基・柱穴・自然流路を検出した。柱穴は発掘範囲が狭いこともあり建物と

してはまともない。このうち井戸から四点の木筒が出土した。

井戸掘形は、検出面では径一・五mの平面円形を呈し、深さは二・五mある。井戸枠は存在しておらず、おそらくは素掘りのまま使用されたのである。井戸内の堆積土は、井戸底近くの自然堆積とその後の埋め立てによるものとに大きく二分できる。木筒は自然堆積土の最上層、植物遺体層から出土した。この井戸からは他に奈良時代前半期の土器と数点の木製品が出土しており、木筒もこの時期に投棄されたと考えられる。

## 三 平城京左京四条二坊七坪

本調査地は七坪の東辺部から東二坊坊間大路の一部に相当する。周辺は平城京跡内でも比較的調査例の多い地域であり、調査地の東、東二坊坊間大路を隔てた左京四条二坊の東半は「田村第」に比定されている。今回検出した主な遺構は東二坊坊間大路の一部とその西側溝、掘立柱建物四棟、塀一条、井戸一基、土壌である。

木筒は東二坊坊間大路西側溝から二点が出土した。同溝は幅一・九・三・一m、深さは発掘区北端で〇・三m、南端で〇・八mの素掘りの南北溝。今回は一・三・五m分を検出した。溝内の堆積土は大きく上・下二層に分けることができる。このうち下層はさらに二分でき、木筒はその最下層から出土した。上層は流れのためか二・五層と複雑な堆積となつておらず、奈良時代後半期の土器が出土した。

## 四 平城京左京三条三坊九坪

本調査地は平城京の条坊区画では左京三条三坊九坪の西北隅に相当するが、周辺の遺存地割の検討から、調査地のすぐ北を西流する佐保川の旧河道が想定される地点である。

調査の結果、現地表面下約1・3mで発掘区全域に広がる自然流路を検出した。発掘面積が四〇・五<sup>2</sup>m<sup>2</sup>と小範囲であったためその規模は不明であるが、堆積層からみて流路には新・旧二時期があることがわかる。木簡は旧流路内の堆積土から一点が出土した。旧流路からは他に古墳時代の埴輪片、近世の土器など各時代の遺物が混乱して出土しており、木簡の年代を決めることはできない。

#### 8 木簡の収文・内容

一 左京三条二坊十二坪・一条大路

- (4) 「江下郷秦× (74)×22×2 059 \*
- (5) 「▽□造廣□五斗□ ▽」 203×31×7 031
- (6) 「□□□毛□」 (70)×(6)×4 081
- (7) 少□□ (95)×14×3 059
- (8) 「□□□ [徳カ] □□□」 (204)×(11)×3 081
- (9) 「一月 □」 (29)×(10)×3 081
- (10) 「十□□□□大□」 (138)×(17)×(1) 091
- (11) 「物マ霜秦」 (107)×20×2 019
- (1) 「▽封 (138)×30×4 039 \*
- (2) 「▽篠嶋大□□□□□□ □大▽」 158×26×8 031
- (3) 「水精玉所食□……□人□人 [舍カ] □人官守。」 (篠嶋)
- ・「『□□檢』 □……□麻田。」 (125+75)×30×3 011 \*
- ・「受カ [集カ] 」

(12) • 「▽播磨国飾」  
〔磨カ〕  
×

・「▽史戸大田」  
×

(77)×17×3 039 \*

他に折損により原形が明らかでなく、墨痕はあるが判読不可能なもの三点がある。

三 平城京左京四条一坊七坪

(13) • 「□□□□□」  
〔返カ〕  
□ 右□五人

(152)×21×5 039

(1) 「▽石見国那賀郡石」  
×

(152)×21×5 039

• 「□□□□□」  
□□□□□

(156)×19×5 019

(2) □

(80)×(8)×2.5 081

(14) • 道□秦略寸△□□□

(91)×(17)×2 081

四 平城京左京三条三坊九坪

• 「□□□」  
□□□

(91)×(17)×2 081

(1) • 「□□」  
□□

(156)×19×5 019

(2) □

(80)×(8)×2.5 081

(1)は材の上端近く、左右の切り込みがある部分に「封」字のみを墨書する。下端を欠損しており全体の形状は明らかではない。「封」字はその中央で、横方向に幅六畳ほどとぎれている。これは長方形の材を紐で物品（あるいはその容器）に固定したのか、紐の上から「封」字を記したからだと考えられる。つまり、この木簡をもつて封をしたのである。（3）は一片に分離しており、直接には接合しないが、材質・形状からみて同一箇かと思われる。他に墨痕はあるが判読不可能なもの七点がある。

二 平城京左京一条三坊十一坪

(1) 「▽□□」

98×15×3 033

材の一側面にも墨痕がある。○一一型式としたが、中世木簡の範疇でとらえるべきものかもしだい。

平城京左京一条一坊十一坪水道局庁舎建設予定地発掘調査会『平城京左京一条一坊十一坪—奈良市水道局庁舎建設地発掘調査概要報告』（奈良市教育委員会 一九八四年）

奈良市教育委員会『奈良市埋蔵文化財調査報告書 昭和五九年度』（一九八五年）

（西崎卓哉）